
櫻、咲く、

鳥野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻、咲く、

【コード】

N1980Y

【作者名】

鳥野

【あらすじ】

私の首筋には、奇妙な痣がある。

そして、記憶にない男の子の声、桜の香り、そんな夢。

幼い時に交通事故にあい家族を亡くした馨は、遅く訪れた初恋に、大切な友人に、育ててくれた家族に、様々な想いを育み囲まれ生活していたのだが。

一人の女の子と、一人の男の子が、恋をする話。

残り香、聞く、

ひゅー、はー、ひゅー、はー、

喉から風が、不規則な音がひっきりなしに出る。

身体中の血管が血液が流れる音が聞えてくるみたいだと思った。心臓の音、どつくんどつくんって、いっぱい聞いてる。

その音に混じって、ずーっと、ずーっと、聞えている音があった。

それは声だ。

私、その声が、たぶん、だいすきだった、の。

「…………、大丈夫っ、だから、ね、大丈夫、だ……絶対に、ぼくが…………」

目を開けると、必死な表情で（でも何故か顔わか、んない）誰かが私に言葉をくれていて。口からは涎がダラダラ出て、私それが気になって、仕方なかった。涎たらしめている自分をその声の子（そう、子供だ、と思う）に見せたくなかった。恥ずかしかった。

だから、涙がぼろぼろ出てきて。

恥ずかしいから。恥ずかしくてたまらないから。

あと、い、痛いから。お腹が、鋭く、火に近づいたみたいに痛かった。

「…………、少し、痛い、かもしれない。ごめ、んね」

どうして謝るの？

いいよ、どうせ、もうさっきっから痛いもん。すっごくすっごく痛いもん。

私、笑ったんだと思う。

そうしたら、そうしたら、その子も、笑った。

私それが嬉しくて、嬉しくて、痛くて頭おかしくなってたかもしれないけれど、嬉しくて、ずっと笑ってた。

すると、どんどんその子の顔が私の顔に近づいてきた。でも、顔はやっぱりわからない。

ただ、香りが、した。桜、そうだ、これ桜の香り、だー。

その子の顔は、私の顔に近づいた、と思ったら、横、私の首あたりへとすー、と寄った。お腹の痛さだけしか感じなかったのに、その瞬間、その子の髪の毛のさらさらとした感触を感じた。

と、思った途端　　！

「あああああああああああ！！！！！！！！！！、！あつ！！！！」

いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、いたい、

「暴れっ、ないっで！お願いだから！もう、少しだからっ！！」

顔を上げたその子が懸命に私の肩を地面に縫い止め、必死で叫んでいた。暴れているのに、こんなに暴れているのに、その子の手はびくともせず私を地面に縫い止め続けた。

首が燃えるようだった。お腹の痛さが火の痛さなら、その痛さはな

んだらう？足が私の意思を無視して、ダン！ダン！と上下に動く、動き続ける。止められない。涎や涙はひっきりなしに出て。なのに、その子は又私の首筋へと、その顔を近づけた。

又！

「だああああ！！！！、あっ！あっ！！！！やつ！やつ！！いやあああ！！！！」

やめて、お願いやめて、いたい、いたい、いたい、いたい、やめてっ！！！！

「ごめんね、ごめんね。痛いんだね。ごめん、でも、こうしないと駄目なんだっ」

何度か首を振りながら叫びまくと、その子の汗が、それから涙が、私の頬にかかった。

「……………ここまででも、だいじよ、ぶかも……………。最後までは無理だね。それでいいの、かもしれな……………」

気がついた時、そこは真っ白な部屋だった。

清潔な匂い、白いカーテン、白い天井、白い大きなベッド。

首を横に向けると大きな窓があり、真っ暗な夜の中、そこには奇妙に大きな月があった。

ズキツとした痛みが首に走った。

首のあたりを触ると、何か違和感がある。鏡を探したけれど見あたりなかったし、ここがどこだかもわからなかった。病院、かなあ。

窓の大きな月、最初は白くどこか黄色くみえた月が、赤く染まっていた。

香、聞く、

「……いい、なあ」

「何？馨、ああ、チェリーブロッサムだね」

ぽつんと呟いた声を香奈に拾われたらしい。

香奈は、馨が軽く目を向けていた淡い櫻色の液体が入った桜の形が浮き出た透明なボトルをひよいとばかり掴むと「ふーん」と呟く。

「そうだね、馨には合うかも。こういう可愛いの。あたし向きじゃないな」

そう言うと香奈は馨の手を引き寄せ、ボトルの前においてあった同じシリーズの試供品のハンドクリームをぺたぺたと手の甲に塗りたくった。ひんやりとした感触のすぐ後にふわっと、桜の青く淡い香りがひろがった。手の甲に鼻を近づけて、くんくんする馨を見ながら香奈はにやにや笑う。

「買えば？……と言いたいけれど、ちと高いよね」

「うん。そうなんだよね。ハンドクリームでも3千円近いし。あ、でもこの練り香水なら1,500円かあ。でもでも、どうせならハンドクリームとシャワージェル、うーん、もう秋だしボディミルクがいいかなー。欲しいなあ」

物欲しげにチェリーブロッサムの薄いピンク色の瓶を見つめる馨に小首をかしげて、香奈が問う。

「へえー。馨、あんまりこういう香りも興味なさそうだったけど」

「あのね、香奈がこういうの好きでしょ。だから、なんか、その、

興味でてきたの」

「なるほどね」

友人の まじはかな 真柴香奈は、名前にちなんでか昔から香り物に敏感だったらしい。

お母さんと一緒に香道のお教室にも通っているし、自分でオイルを買ってきて調香する事もあるのだという。

「だから、同じ香の字が入ってる馨の事、クラス一緒になった時から気になってたんだよね」

そんなきっかけとなった自分の名前が馨にとって、有り難かった。引っ込み思案な馨は、行動的でけれどどこか繊細な雰囲気も持っている香奈に憧れていたのだ。

そんな香奈が好きなのは、爽やかな香り。学生だから重たい香りは付けられないしという理由もあるのだそうだけれど、香奈が選ぶ香りは全て彼女に合っていると思う。清々しく颯爽とした燐とした香り、近くによると馨は、何時も一瞬うつとりしてしまう。それは馨だけではなく、同性の後輩や先輩、そして男子達も同じようで、香奈は人気があった。

「あ、あのね。それと私、桜の香りが好きなの」

「あれ。ああ、そうなんだ。そっか」

頷く馨にふーん、と呟くと、香奈は棚の他のシリーズの試供品たちに熱心に鼻を近づけたり、ボトルやパッケージを楽しんでいた。香奈は将来香り関係の職につきたいのだ、とある時真剣に私に言った。

「香り関係？」

「そう、香り関係。調香師、ああ、化粧品会社のとかね。アロマセラピー、キャンドル屋、もちろんアロマキャンドル専門で。ソムリエ、ほら、ワインって香りも味わいつくすんでしよう？まあ、でもこれはわかんないよね、私まだアルコールが好きかわかんないし。お線香やら蝋燭の会社。香道の講師。ああでもこれも難しいかもない。とにかく、ま、まだまだわかんないけれど、香り関係の職、ね。決めてるの」

将来の事なんて、馨は全く考えた事がなかった。

今年の初めは、なんとか高校生になる事、しかも公立に受かる事、と受験の事で頭がいっぱいだった。受験の事を考えている事はイコール将来を考えているではないか？と思う人もいるかもしれないが、なんだか違うように馨は思う。義務教育は中学までだけれど、大体の人間は、高校まで進学する。もちろん、馨を今育ててくれている両親も馨にそれを望んだ。周りがそうするから、それが普通だから。だから、高校に行く。自分の学力に合った学校を選ぶ。それは、将来のことを考える、香奈の話してくれる、将来の事、とは違うように思う。

(やっぱり、香奈は、すごいなあ。私のがんびりしてるだけでホントは皆もう考えてるのかなあ)

気が焦った。不意に桜の香りが鼻をくすぐった。

手の甲に鼻を近づける。淡い桜の香り。落ち着く、匂い。

この香りを纏っていたら、あの想い出の夢のような子ども、多分男の子、の顔を想い出すかな？その想像は馨のこころを甘く、淡く、ほんのりと温めてくれた。

瞬間、ずきっ！とした。

首筋にずきつと、鋭い痛みが一瞬走ったのだ。痛む場所、首筋に手

を近づけようとした時、香奈の言葉が耳に響いた。

「あ！馨、もう6時だよ！あんた、今日夕食当番なんですよ！？」
「……あ」

鞆の中をがさごそ漁り、簡単携帯を取り出し開けると、確かにすでに午後6時をまわっていた。馨を急き立てるように香奈が言う。

「ほらほら、もう帰んな！私は、もう少し見てくわ」

「う、うん！又明日ね！香奈」

駆け出そうとした馨に、頷きながら香奈が不思議な事を言った。

「でもこれで謎は解けた！だよ。馨、たまくに、うん、桜の香りしたもんね。なんか桜のコロンとか練り香水とか、ハンドクリームつけてたんだね」

え？

桜の香りの匂い袋は確かに持っているけれど、学校に持っていった事はなかった。練り香水もコロンも持ってないよ。訂正しようと思っただけれど、すでに駆け出していた馨はスーパーで買う本日の食材の事ですぐに頭がいっぱいになってしまった。

「馨、おせーよお」

帰宅し、台所に直行した馨を出迎えてくれたのは義弟である手島優羽てしまのよく通る声だった。本人をみやると、手にはスナック菓子があ

り、すでに半分近く食い散らかしているようだった。

「あれ？優羽くん、今日部活じゃなかったっけ」

「3年はもうお役ご免だよ。それでも顔出しとかしてたけど、2年もしっかりしてきたし。そろそろ受験追い込み」

「受験かあ。優羽くん、そういえば、どこ受けるの？私訊いたことなかったよね」

使わない食材を冷蔵庫や食料庫にしまい、本日の料理に使用するものを並べていく馨の背中につまらなそうな声が届いた。

「お前といっしょんとこー」

ちよつとびつくりした。

「優羽くん……、嫌じゃないの？私と一緒にのころって」

「あー、まだ気にしてんの、馨」

豚肉にさつさと塩こしょうして、片栗粉をまぶしながら小さく呟いた。

「少し？」

「だよな。オレも悪かったし、お前の性格じゃなー」
キャベツを切りながら、次の義弟の言葉を待つ。

「小、中とさ、高校じゃ違うだろ？オレらの事知らん人間のが多いし。それに高校入学を期にお前うちの姓に変えたし。なんていうか、いいじゃん別についていうか。でもさー、なんだって、今まで名字守ってたのに高校になって変える事にしたんだよ」

フライパンにオリーブオイルを垂らし、あたためる。

「心境の変化？区切り、とか」

「ふーん。他にもうちの名字になる方法あったのにねーって、オレらのマザーはゆってたけどね」

「他の方法？」

お味噌汁作りにとりかかる私に優羽が言う。

「馬鹿馬鹿しい方法だから。　　気にすんな」

私の名前は手島馨。てしまかおる

でも、今年の2月までは？？きよはかがおる馨という名前だった。

「ところでさ、馨。お前、生理？」

お味噌をとかしいれていると、優羽が失礼な事を言った。

時々、優羽はこういう無遠慮というか、とんでもない事を言う。ま
ずいと思う。

「ちつ、違うけど！優羽くん、女の子にそんな事言っちゃだめだからね！」

「他の人間に言うかよ、身内だからだろ。……違うんか。匂いがしたんだけどな。でもそうだよな、お前先日週終わったばっかだよな」

「優羽くん、それおかしいから。身内の生理周期知ってるって、おかしいんだからね！」

失礼な。……そ、それとも匂うのかな？私生理中。

「ぶ、豚肉のせいじゃない？　　ね、ねえ、優羽くん、私生理中、

その、に、匂うの？」

「うーん、そういうんじゃないんだけどさあ」

お味噌汁作りながら思った。

やっぱり、やっぱりあの桜の香りシリーズで買おう！どうしよう、
今まで私そんな事言われた事なかったけれど、匂うのかなあ。歯磨
きもいっぱいしよう！お風呂も少し長く入ろう！

なにより馨の頭の中には、一人の男の子が浮かんでいた。

(遠峰くんにも……、そう思われていたらどうしよう)

香、読む、

「お義父さん、私ね、アルバイトをしたいの。申請書に判子貰えな
いかな」

義父の帰宅は何時も遅い。

それでも今日は日を跨いでいないだけ、早い。おかずをレンジで温め直し、お味噌汁に火を通したものを食卓に並べると義父は、待ちかねていたように箸を持った。そんな義父の前に座り、馨は学校の総務課から貰ってきたアルバイト申請書を食卓に置いた。

馨の通う高校は、アルバイトに親の承諾を得た申請書が必要だった。アルバイトについては考えていたので、申請書は鞆にしまっていた。最後のきっかけは、先ほどの優羽の発言だ。

義父である手島一臣てしまいちのみは、眼鏡の奥の目をぱちぱちさせると、ゆっくりと食卓に置かれた申請書を目にした。どこかおっとりした動作と優しい面立ち、かけている眼鏡も冷たそうではなく、頭がよさそう、といった印象となる義父を知ると、友人達は「馨はお父さんに似てるね」と言う事も多い。血のつながりなど全くないけれど、そのようなものを越えて、馨はこの義父の側にいると安心感をもらえる。

「おこずかい足りないのかい？」

義父は、のんびりと馨に訊いてきた。

「香奈も、あゆもバイトしてて、私もしたいなって、思ったの」

「それが僕の質問に対しての馨の答え？」

あ、と思った。

義父は許さない、そう思った。

「欲しいものがあるの。変な物じゃないの。自分でお金貯めて買いたいなって。香奈たちの話きいてたら、楽しそうで、私もしたいなって思ったの。私、部活とか入ってないし何かしたいなって。あ、あと、夕食当番の時には絶対バイト入れない。今までと変わらずに家の事もするよ」

ふーん、呟くと豚肉の生姜焼きをそれは美味しそうに一臣は、食べた。

「馨の作る料理は美味しいからね。全部の日をスーパーのお総菜やお弁当だと僕もつまらない。馨の和食は、お母さんより旨いと僕は思う。でもね、別に家の事は強制じゃない。けれどまー、母さんが単身赴任中の今、馨が家の事をしなくなったら、僕も優羽も結構困るからそれは変わらずに参加して貰うけどね。……なんだ、強制だね。何時もありがとう、馨」

「う、うううん」

ぶんぶん顔を横に振ると一臣は、それは面白そうに口の端をあげてから、目線を上にあげ、言った。

「家の事をして、バイトもするって、大変だ。馨の欲しいものを僕が買えば、馨はバイトしないかな？」

これは義父の柔らかなテストだと思う。
義父は、どんなに忙しくても私や優羽との対話を怠らない人だ、と思う。

「ううん。それでもバイトしたい、と思う」

「もしかして、バイトで稼いだお金を、そうだな、大学資金にしたとか、家に入りたい、とか、生活資金にして、手島の家に負担を

かけたたくない。なーんて、考えていたりする？」

頬に朱が走った。

「ご、ごめんなさい！お義父さん！私それ、全然考えてなかった！」

一臣は、上にあげていた視線を馨に戻したかと思うと。

「あーはっはっはっはっ！！！！」盛大に笑い出した。

お風呂に入っていた優羽が台所にくると、笑う父を迷惑そうに見た。そのまま冷蔵庫を開け、飲み物を取り出すと「うるせーよ、父さん今何時だと思ってるんだ」そのまま、飲み物を持って台所から出て行く優羽の背中に一臣が声掛けした。

「あー、すまんすまん」

それでも一臣の笑いは、小さくなくても続いていた。

どうしよう、どうなるのかなあ、と笑う一臣を馨はじっと、どこか不安気に見ていたんだと思う。間もなくして、一臣は笑いをおさめると、馨に謝った。

「うん、まー、ならね。まずはいい」

(まずは)馨は義父の次の言葉を背を正し待った。

「僕からは3点」

こくこく頷く馨を笑いながら一臣は言った。

「今まで通り家事をする事。優羽にも相談して、少しあいつに負担を増してもいいが、それもあくまでも少し。まあ、協力しなさい。僕も助けられる事はする、が、悪いとは思っけれど、今仕事が厳し

い。せいぜい、そうだね、今まで通り、皿洗いに、簡単な掃除、自分のスーツのクリーニング管理程度しかできないと思う。これは謝ろう、ごめん」

「うん。大丈夫。お義父さんの仕事が今本当に忙しいのはわかるし、家がおるそかになるようなら、バイト辞める」

箸を完全に下に置くと言いつつ身を乗り出し一臣は続けた。

「それとだ。教会には週一なんて言わないが月一は、出る事。バザーは参加」

「あ、それはわかってる。もうね、バザー出品用のあみぐるみを作り始めてるの」

「へえー。と、いうか、あのさ、馨。あみぐるみってなんだい」

「もう！私よく作ってるじゃない。毛糸で作るぬいぐるみ」

「あー、あれかあ。あれ、あみぐるみというのか」

あみぐるみ、あみぐるみ。

ツボに入ったのか、一臣は繰り返しあみぐるみと呟いた。

「ふーん。ああいうの好きな人間は多いだろうし、いいんだろうねー」

「私の作るあみぐるみ、結構人気なんだよ」

「なるほどねえ」

手島家は一家全員クリスマスチャンだった。

馨もこの家の子どもになった時、そうだった。手島家とともに仲良くしていた馨の生れた家、??の家も時々教会のイベントを手伝っていた事もあり、特に不満もなく馨は洗礼を受けた。

でも何故か、義父や義母、優羽には言わなかったが、馨は教会の雰囲気や神父、シスターの視線が苦手であったために日曜礼拝はさぼ

りがちだった。義父母も優羽もそうだったから、特に何も咎められたことはない。時々優羽が「オレ等えせカソリックだよなー」と笑う程。でも、それでも月一は日曜礼拝に参加したし、毎年の告解（赦の秘蹟）に降誕祭、復活祭、バザーには参加していた。

そんな事を思っ馨を視線に入れながら、一臣は、あごをなでていた。

「次。ラスト。あのね、馨。どこでバイトする気なんだい？」

「へ？」

「そこが実は一番気になるなあ」

そういうものなのかなあ。首をかしげてから馨は候補をあげた。

「高校生を雇ってくれる処って、少ないの」

「だろっね」

馨は幾つかの候補をあげた。

カフェにマックといった飲食店のホール業務にお弁当屋さんやホテルの調理場、そして駅前の本屋さん。

「駅ビルの中にある本屋じゃなくて、駅前のあの本屋？」

「そ、そう。なっ、なんか好きなの、あの本屋さん」

変に思われなかっただろうか。顔が赤くなりませんように、と心で何度も唱えた。

「僕もあの本屋は好きだなあ。品揃えも面白いし、夜遅くまでやっているのもいい……って、馨、バイトは遅くても夜9時までにしなさい。いや、受かった場所によっては8時だろう。そもそも高校生は夜10時までのバイトしか認められていないし、いやその前に馨は女の子なんだし……」

あ、まずい！
慌てて馨は話題を変更した。

「あのね！夜9時までしかしない！あと明るい処にあるお店しか受けないから！」

「……カフェとか飲食店のホールは駄目だからね。ホテルやらお弁当屋の調理場はいいし、本屋も、まあ、いい」

「なんで？お義父さん」

溜息をつくとき、一臣は申請書を引き寄せ、再度読み終わると席を立った。

又席に座ると、その手には判子。

「とにかく、駄目。じゃないと押さない」

「わ、わかった、よ？」

よくわからないが、ともかくも判子付の申請書を馨は手に入れた。うきうきした表情で申請書を見る馨の首筋に一臣は、その時気づいた。

「馨、首、痛かったかい」

「あー！」

首筋の痣を馨は咄嗟に隠した。

別に隠すものでもないのだけれど、小学生の頃散々からかいの対象になったために、どうも条件反射なのだと思う。そんな昔の痣だというのに、何故か時々刺すような痛みを感じる事がある。義父はそれを知っているのだ。

「うん。どうしてなのかなあ。一瞬ね。痣、そんな目立つ？」

「いや。僕は知っているからね。だから、気づくんだよ。それに痛

みも、おそらく、季節の変わり目だからじゃないかなー」

首筋の痣はある時から突然出来ていた。

ある時、ほんとの両親を亡くした日。交通事故にあった日から、不思議な事だと思う。時々馨は、この痣は両親達が、自分たちを忘れないで、と馨に残したものなんじゃないか、とさえ思う。そう思うと、時々もう両親を忘れていている事のある自分をどうしていいかわからなくなる。

それに。

「変だよ。首筋に二つの痣なんて。まるで吸血鬼みたいって、やっぱり私も思うよ」

一臣は馨の言葉にきょとん、とした顔をして笑った。

「馨はやっぱり女の子だからかなあ。ロマンストだよ。それなら馨は教会に出入りする度に、なんだっけ痛んだり、灰になったりするんじゃないかい？」

一臣のにやにやした顔に少しばかり馨は照れた。

(ほんとだ。昔吸血鬼みたいだって、男の子たちからかわれた時も優羽や友達がそう言っつて、やりこめてくれたっけなあ)

首筋にかけていた手はずすと、一臣が笑いかける。だろう？つて、そんな風に。馨は一臣に「おやすみなさい」と申請書を手に居間を出ていった。

入れ替わりのように優羽が居間へと入ってきた。

ちらり、馨の出たいった廊下へ目をやって。

「まさかオレに同じバイトをしる、なんて言わないよな」

「お前受験生だろ」

「へえ？そーゆー気遣いはしてくれるんだ」

「どうしてそう、捻くれるかね」

缶ビールのプルトップを開けると、ぐびぐびと一臣は喉を潤す。

「父さん、今日あいつ、なんか匂った」

だいこんの味噌煮にきゅうりとシラスの梅肉和え、ひよひよい箸を進める一臣に優羽は苛立った。

「首筋の痣も今日は妙に目立つし、あいつさ」

「優羽」

むっとした顔を隠さず、優羽は黙ると父親の言葉を待った。

「過敏になるな。夜遅くなった時は迎えに行け。それはいいな。以上」

本屋さん、本屋さん、受かるといいなあ。次はお弁当屋さん。申請書を見つめながら、馨はにこにここと緩む顔をおさえられなかった。

次の日、香奈の呆れ顔を背にして、教室をかけた。

駅前の本屋に履歴書持参で面接にいくために。すでに朝のうちに面接の予約を入れていたのだ。簡単な受け答えで、ネックになったの

は高校生であること。夜8時まで、という時間については、女の子はもともと8時までしか採用していないらしかった。

「土曜の午後3時から6時ってできる？」

中途半端な時間だなあと思ってたけれど、頷くとそれが決め手になったようで、次の日、採用との留守電が早速響の携帯に入っていた。

ほんとうに、嬉しい、嬉しいことがあった。

「あ、れ」

目の前に、遠峰くんがいた。

初めてのレジ業務。隣にはベテランのお姉さんがついてくれて、書籍のバーコードをバーコード読み取る機械で、ピッピッと私が打つと、お姉さんが隣で「カバーかけますか？ありがとうございます」とと挨拶を口にする。その間にレジからおつりがジャラジャラ出てきて、お客さんに手渡す。

「ほら、手島さんも『ありがとうございます』『忘れてるよ』

「は、はい！……あ、ありがとうございます」

緊張して、照れて、ずーっとうつと顔が熱かった。

慣れない。全く、慣れない。ど、どうしよう！

お姉さんには「そんなに緊張しなくていいから、いいから」と何度か言われたけれど、無理。

そんな時だった。

「あ、れ」って、上から声がした。

本を差し出されると、お客さんの顔を見る余裕なんてなくて、とに

かくバーコード！！と思ってしまう私だったけれど、その声に響も顔をあげた。

あ。

顔は、真っ赤、だった、と思う。

でも元々真っ赤だったから、どう、更に真っ赤になるんだろう、と思ったら耳が痛くなってきた。暑くて、暑くて。痛くなった。手まですで震えてきた。

「お客さま、この子と、ああ、すみません。うちのバイトの子とお知り合いですか？」
お姉さんの声が聞えた。

響がずーっと、ずーっと憧れていた遠峰くんがそこにいて。それと、それと。

「はい。多分、同じ高校なんですけど、彼女は僕の事知らないかも」
頭の中が真っ白になった。

遠峰くんが私の事を知ってるんだって！！

はっとした。

「いえ！　　し、知ってます。な、なんとなく、」

変な事を言った、ろう、か。

なんか三人の間に沈黙がある。ど、どうしよう！それになにがなんとなくよ！

嘘つき。私の嘘つきーーーー！！！！

ここの本屋をアルバイトに選んだのも遠峰くんがよく買いに来るの

知ってたからじゃない！！！！でもまさか、初日から会えるか思
つてなかったから、心の準備ができてないよ。

でもそんな事を言える訳はなくて。

「そうなの。あ、この子、手島さんね、今日からうちでバイトして
るんですよ。お客さまよければ又買いに来て下さいね。とっても
お客さま、うちの常連さまですものね」

「ああ、そうなんですか。よろしく願います」

お姉さんが私を遠峰くんに紹介すると、何故か遠峰くんは私にそう
言って、お辞儀をしてきた。隣のレジのお客さんやバイトの子もど
こかきよとん、と私たちを見ていた。

「あ！い、いえ。えっと、その、こ、こちらこそ、あの、まだ慣れ
ませんが、よろしく願います」

お姉さんが耐えきれないという風に、吹き出した。

その後、なんとかレジ業務を終え、私はお姉さんがいなくなった隙
に、それとなくよけておいた遠峰くんが購入した本の間にはさまっ
ていたしおりみたいなの（売り上げカードというらしい）ものを見な
がらメモ帳に急いで書籍名をうつしとった。

「手島さん、あがっていいよ」という店長さんの声に他のアルバイ
トさんや正社員の方にお疲れ様のご挨拶をして（お姉さんは既にあ
がっていた）お店の裏にあるバッグヤードに行くと、エプロンをは
かず。

私は又フロアに戻ると、本棚を確認して、遠峰くんが購入した本が
もうない、とわかると、店長さんに言った。

「あ、あの本を注文したいんですけど、いいですか？」

「ああ、いいよ。うちで買つと少し割り引きしてあげるよ」

「え！そうなんですか」

うんうん、頷くと店長さんは、他のバイトの男の子を呼ぶと

「手島さん、本を注文するんだそうだ。ついでに注文書の書き方を簡単に教えてやってくれ。まー、もう上がってるから、とりあえず簡単に」

注文口は、カウンターがちょっと高い。

馨は身長が低いので、少し背伸びして注文書をのぞき込んだ。

男子バイトの子が指さすところに、注文する書籍を書き、自分の名前と電話番号を書く。

「着いたら、電話する？」

「いえ、あのバイトでくるから」

「そうだね」

受け取りの部分を切り取ると、男子バイトさんはそれを馨に差し出した。

「注文してから、うちに着くのは大体一週間かかる」

馨は驚いた。そんなにかかると思わなかったから。男子バイトさんは苦笑して言う。

「そう思うよね。かかるんだ。お客さんにもそれはたまに言われる。手島さんも注文を受けるようになったら、それよく言われるかも。覚悟しておいて。だから、今だとネット通販に負けちゃうね、本屋は」

本屋を出る頃は、もう辺りは真っ暗だった。携帯を取り出すと薄青い画面から、午後8時半とあった。

「馨」

振り返ると、優羽が立っていた。

「え！迎えに来てくれたの？」

「まー、そう。初日だしおまけ」

つまんなそうに立っている優羽が、今日はとっても可愛くみえた。ここにこする馨を薄気味悪そうに優羽が見る。

「ありがとうね、優羽」

「あ、うん。まーな。何？そんな楽しかったの？バイト」

鞆の中にいれた受取書を意識すると、今日の出来事を思うと、どうしてもにやにやしてしまう。よかった。やっぱりアルバイト初めてよかった。

嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

「うん。とっても、とっても楽しかったの！」

優羽が目を細め、夜だというのに、なんだか眩しそうにしていた。

香、読む、（後書き）

一人称と三人称とかごっちゃになってるかと、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980y/>

櫻、咲く、

2011年11月16日20時55分発行